

## 見霊者ゲーテとその文学 (3)

新保, 弼彬  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5431>

---

出版情報 : 言語文化論究. 15, pp.91-103, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 見霊者ゲーテとその文学（3）

新 保 弼 彬

### V 聖霊の流出

「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。これはイエスを信じる人々が受けようとしている聖霊をさして言われたのである。」

（ヨハネによる福音書 7章38, 39節）

ゲーテが聖書の使徒行伝にみられる聖霊降臨の奇蹟を中心に二つの神学論を展開したことについては、前回「聖霊の満たし」と題する第IV章ですでに詳述した。<sup>1)</sup> 若きゲーテはその虚構上の書簡、『\*\*\*教区の新任牧師に宛てた\*\*\*教区の牧師の手紙』に託して、アルノルト、エーティンガー及びロックらに代表される「狂信者や靈感派の人びと」、あるいはまた、彼らが「直接神から受けた」とされる靈感を熱烈に擁護したのであったが、それとは対照的に、ともすれば啓蒙主義者の視点に立ち、あらゆる熱狂や狂信を冷ややかな眼で見ていた聖職者たちの信仰姿勢に対しては、「君たちは聖霊の働きをせばめるつもりなのか」と鋭く批判の矢を放っている。この発言には、「聖霊のもろもろの働き」に突き動かされて創作することに、詩人としてあるべき本然の姿を感じ取っていた、この時期のゲーテの偽らない心情が込められているのである。そう言えばゲーテは、この狂信者擁護論に入る直前にも、新教の二礼典である洗礼と聖餐に関して新たな解釈を試みているが、ここにもまた、聖霊のモチーフが極めて重要な役割を演じていることを見逃してはならない。老牧師の口を通して語られる聖礼典の本来の意義とは、こうなのである。主イエスが地上を後にしたとき、初代の「情愛に満ちた」弟子たちは、「主との親密な合体を乞い願って」、魂の享楽だけでは飽き足りず、「肉体のためにも、何ものかを要求することになったのだ」という。

「なぜなら肉体はつねに人間の重要な一部分だからである。そのため聖礼典が弟子たちに、その切望していた機会を与えることになったのである。恐らく彼らの肉体は、洗礼や按手という感覚的な行為に感極まり、われわれを絶えず取り囲んでいる聖霊の息吹に共鳴するうえで不可欠の、他ならぬあの音色を、魂に授けたのであろう。……そして、これこそはまた、彼らが聖餐の折にも感じていたものであった。……」<sup>2)</sup>

本来キリスト教の教理において、洗礼は御霊による新生の象徴として、また聖餐はキリストのからだに与る霊的な行為と解されるべきものであるが、ゲーテはここで大胆にも、それらを「感覚的な行為、ないしは、しるし」として捉え、しかもそれらを、肉体と超感覚

的な世界との接点として、いわばその両者を繋ぐ媒体として位置づけようとしているのである。ゲーテの考えに従えば、聖霊の風は思いのままに吹き渡り、その息吹は万有の至るところにその調和あるメロディーを奏でている。しかも、さながら音叉のように、かつてその「音色」に共鳴することができたのは、ひとりキリストの初代の弟子たちに限られていた。彼らこそはあの時代の選ばれし人びとであったのだ。そしていま、若きゲーテの生きる現代において、聖霊の奏でる旋律を、その「音色」を聞き分けることのできる鋭い感性に恵まれた選ばれし人とは、いったい誰なのであろうか。それはまさしく天才的な芸術家や詩人以外の何人でもない、とゲーテは『牧師の手紙』の、この二礼典をめぐる聖霊論を足掛かりにしながら、それをさらに敷衍して、建築や文学の創造にまつわる芸術論の域にまで高めようと試みるのである。

この時期の芸術論に関する、そのもっとも典型的な一例として、『ドイツの建築術について』を挙げることができよう。この論文の草稿は1772年11月すでに書き上げられていたのだが、実際に公刊されたのは『牧師の手紙』や『聖書の問題』と同じく1773年のことであった。その出版もまた同じくメルクに依頼していたようである。ゲーテは本論において、特にシュトラースブルクの大聖堂を手掛けたとされるエルヴィン・フォン・シュタインバハの卓越した建築術の本質に迫ろうとしている。この論の趣意は、あまりにも技巧的で均斉のとれたフランスの古典主義様式に比し、直接感じたままを造形するこの工匠の建築こそ、「唯一の真の芸術」であることを実証することに他ならなかった。それゆえゲーテは終日、幾度となくこの大聖堂の前に立って、四方八方から眺め、それを細かく観察した。すると、ある夕暮れどき「かすかな予感とともに」、シュタインバハの守護神ゲーニウスがその姿を現し、<sup>3)</sup> まるで「永遠の自然」が創造したかのような、この「調和のとれた偉大な」作品の秘密について明かしてくれるのである。その「囁く」ように語る細やかな教示により真の建築術に開眼したゲーテは、ゲーニウスに向かってその限りない謝意を、次のように表明している。

「しっかりとした基礎の上に打ち建てられたこの巨大な建物は、その外壁の至る所を寸断されながらも、さながら永遠を目指すかのように、何と軽やかに空中に聳え立っていることだろう。私はあなたの教えに感謝しよう、ゲーニウスよ。あなたの深淵を前にしても、もはや目まいを覚えることはないのだ。このような創造物を見おろして、神のように、『これでよし！』とすることができる御霊の、その安らかな歓喜の一滴が、私の魂にもそそがれていることを感謝しよう。」<sup>4)</sup>

ここでゲーテは聳え立つ巨大な建物を前にして、聖書のあの壮大な天地創造の光景を想起せずにはおれなかった。あの創世記の開巻劈頭には、「はじめに神は天と地を創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」とあるではないか。<sup>5)</sup> つまり、神の創造のみわざの始まる以前からすでに存在していたもの、それは形なき地と、深い闇に包まれた淵と、その深淵の最果てに広大無辺な広がりを見せている水とであったというのである。だが、地ははまだ混沌としてその雄姿を現さず、深淵はその暗黒のとばりの中にかき消えていたとすれば、深い闇の奈落の底に茫洋として横たわる水こそは、森羅万象生成の原初に唯一存在していた形ある実体ではなかったのか。

しかも、そのおもてには、水をすっぼりと包み込む形で、「神の霊が漂っていた」と記されている。さながら「永遠を目指すかのように、空中に聳え立つ巨大な」創造物を眼の前にしたとき、ゲーテの脳裏には明らかにこの創世記冒頭にみられる天地創造以前の、「神の霊におおわれた水の淵」の織りなす風景が鮮やかに思い描かれていたように見える。であるからこそ、ゲーテの「巨大な建物」に関する考察は、突如として、「あなたの淵を前にしても、最早めくるめくことはない」という、一見何の脈絡もない「深淵」への言及へと連なっていくのであろう。この推測が当を得たものであることは、この直ぐあとに続くゲーテの、先の引用の結びの言葉によって裏付けられる。「このような創造物を見おろして、神のように『これでよし！』とすることができる聖霊の、その安らかな歓喜の一滴が、私の魂にも落とされているのだ」。ゲーテがここで、「これでよし！」と口にするとき、それは、神が六日にわたって万物を創造し、その造られたものを観賞して、その都度「良しとした」とされる、あの全能者の力強い自己確認のことばを想起させずにはおかない。しかもゲーテは神のこの創造のわざに、「水の淵」を司る三位一体の神、聖霊そのものが直接関与していたものと解している。あとき、美と調和の極致にあった被造物に向かって、この上ない「平安な歓喜」を覚え、「これでよし！」と思わず言葉を発したのは、誰であろう、聖霊なる神であったのだ。そしていまゲーテ自身も天地を創造した「神のように」、あの大聖堂を「見おろし」、あたかも神の御霊があゝの観照の極みにおいて示したような「安らかな歓喜」に満たされて、その作品を心ゆくばかり享受しているというのである。このようにゲーテはあゝの偉大な芸術家シュタインバハの建造物を、創世記における神の創造のわざと対比させ、しかも、その作品を観賞する自己の享受者としての心境を言い表すにあたっては、「神の御霊」の思いにさえ言い及んでいるのである。しかしながら、それはあくまでも表現上のあや、比喩にすぎないのであって、ここで直接呼びかけられ、強く意識されている対象がゲーニウス、すなわち芸術家のうちに宿る個性的な創造精神であることは言うまでもない。つまり一言でいえば、ゲーテはここで芸術家の創造する「精神」を、神の「御霊」の働きになぞらえて表現しているのであろう。

したがって、この「霊」と「精神」とのアナロジーは、建築論が芸術論へ、そして「唯一、真の個性芸術」の定義づけへと高まるなかで、さらにその深まりを見せ、創造的芸術「精神」の生まれる過程が美と「霊」との係わりのなかで論じられることになるのである。

「この個性的な芸術はいまや唯一、真のものである。……そのみが美であり、しかも永遠なるものにその源を発する自然の調和というものがあって、その主要和音は証明できるが、その秘密は、ひとり神に似たゲーニウスの命の奏でる、至福のメロディーの躍動によってのみ感じ取れるものである。そして、魂がこの自然の調和のもたらす感情をめざして、いよいよ激しく昂揚するようになると、この美が一つの霊の本質のうちに浸透して、その美がその霊とともに生まれてきたように思えるようになり、こうして、その霊にとってもまた、美以外の何物も満足いくものではなくって、その霊がそれ自身のうちから美以外の何物をも生み出さなくなるようになる。このような境地に、芸術家がなればなるほど、彼はますます幸福であり、栄えある者となるし、またそうなれば、われわれもまた、その前にますます身をかがめて、神に油そそがれたその人を崇めることになるのだ。」<sup>6)</sup>

われわれはここで先ず、ゲーテが個性芸術を生み出す真の芸術家のことを、「神に油そそがれた者」として捉えている点に注目しなければならない。この「神に油を注がれた者」という表現は一般に旧約聖書では、油塗の儀式によりイスラエル王国の王とされた者を、さらに新約では王としてのメシア、すなわちキリストのことを指している。したがってゲーテはここで芸術家のことを、聖霊の注ぎを受けて選ばれし者、すなわち、神と人のなかをとりもつ唯一の仲介者として位置づけているものと考えられよう。しかも、「油をそそぐ、塗油する」という行為の背後には、聖書における聖霊の象徴としての「油」の形象が疑いなく見てとれるのである。<sup>7)</sup> そうだとすると、「美が一つの霊の本質のうちに浸透し、その美がその霊とともに生まれてきたと思えるようになる。すると霊もまた、美以外の何物にも満足できなくなると、それ自身のうちから美以外の何物をも生み出さなくなる」などと如何にもしかつめらしく、芸術の核心をなす美が芸術家のうちに生成する過程を書き綴っていたゲーテの脳裏には、しきりと聖霊の形姿がちらついていたのではあるまいか。このことはまた、神秘主義や敬虔主義において聖霊との関連で至極一般的であった「本質」(Wesen)、「浸透する」(eindringen)、「生み出す」(wirken)などの術語が立て続けに用いられていることを見ても明らかであろう。ドイツ敬虔主義語彙辞典の編纂者として名高いアウグスト・ランゲンによれば、さる著名な敬虔主義者の賛美歌のなかには、「汝、主の御霊よ、なれこそ、神のみもとを離れ来たりし者なれど、神と等しき質(本質)にています」といった歌詞があり、聖霊は一般に神と等しい「本質」を有するものと考えられていたようである。<sup>8)</sup> 次に、「浸透する」という語についても同様のことが言える。ランゲンの語彙辞典にはまた、「おお、真白き光よ、おん自ら、わがうちにいれ給え」という敬虔主義者ボガツキの詩句が挙げられている。<sup>9)</sup> この短いテキストからだけでは、作者が何に向かって語りかけているのか不明であるが、光は聖霊のメタファーでもあるところからして、ここで、「わがうちにいれ給え(dring...ein)」と呼びかけられている対象が、紛れもなく聖霊であることは容易に想像がつかう。それゆえ、ゲーテが「一つの霊の本質のうちに浸透する」と書きつけるとき、そこには明らかに「聖霊」が意識されていて、いかにも敬虔主義者らしい語り口が感じとられる。この推論をさらに決定的なものとする語がもう一つ、このあとに続くゲーテの、「その霊は美以外の何物をも生み出すことはないのだ」という発言のなかに現れる。それは「生み出す」(wirken)という動詞なのだ。ゲーテが『牧師の手紙』のなかで聖職者たちに向かって、「君たちは聖霊の働き(Wirkungen)をせばめるつもりなのか」と迫ったことについては先に述べたとおりであるが、そこには動詞 *wirken* から派生した名詞形が、しかも聖霊との密接な関連の中で用いられている。だが、ここでは動詞 (*wirken*) そのものが、しかも他動詞として使用されているのである。そのような場合、この動詞は聖霊の働きによってもたらされる「実り」を含意していたことが多いようである。ランゲンはこの種の用例として、ドイツの敬虔な賛美歌作詞者テルステーゲンの言葉、「神の語らひは実りを生む(Wircken)。神は語り、人の心のうちにあらゆる美德を生み出すものだ(wirket)」を、その一例として取り上げ、さらには、聖霊に関する用例をも、アルノルトの作品から引いている。<sup>10)</sup>

以上、敬虔主義的傾向の強い語彙の分析から見ても、ゲーテがここで、真の芸術家のうちに美そのものの形成される過程を、聖霊論に託して論じていることは、ほぼ間違いのない事実である。要するに、ゲーテがその極めて唯美的な芸術論によって言い表そうとした

のは、こういうことなのであろう。自然のうちには美そのものを体現する調和ある旋律が響き渡っている。そして、その神秘的なメロディーを感得し、感動して、そのいや増しに高まる感情の昂揚に身を任せきることのできる芸術家、シュタインバハの如き天才にのみ、自然はその美の本体を、その人自身のうちに現すのである。しかも、その美の啓示される過程は、キリスト教にいう御霊による新生にも比することができるというのだ。その教説にしたがえば、神の御霊が人の霊の本質のなかに浸透し、その人と一体化して、そこから霊による新たな命がその人のうちに生み出されることになるのであるが、ゲーテはここで人の霊のうちに浸透する主体と、そこから生み出される客体とを、「神の霊」に代え、「美」そのものとしているのである。いわば聖霊論に比しながら、「美」の生成を説いているものと言えよう。したがって、この論の帰するところは、当然のことながら、賛美歌の頌詠にも似た芸術家礼讃の言葉なのだ。美が啓示され、至福の絶頂にある芸術家は、あたかも救世主のように崇められ、その光景は、み前にぬかづく人びとの礼拝によって最高の高まりを見せることになる。こうしてゲーテは、神に選ばれ御霊の注ぎをうけたメシア、新たな仲保者である芸術家の、まじかに迫った到来を待望しているのである。

ところで、この箇所との関連で直ちに想起することは、この建築論公刊とほぼ時を同じくしてゲーテが『聖書のもう一つの問題』のなかで聖霊降臨の奇蹟を論じ、そこにおいても、「永遠の御霊により選ばれた者」、新たな見霊者の出現を予見していたことである。その預言は次のような意味深淵な言葉で結ばれていた。「……御霊に選ばれし者は進み出て、その心情をまわらぬ舌で歌うがいい。その者はいでよ！われらはその人を尊ぼう。その君は、いずこから現れようと、幸いなるかな！異邦人を照らす君、諸国の民を温める君よ！」<sup>11)</sup>ここで結句に使われている表現「異邦人を照らす君」は明らかに、ゲーテの通曉していた旧約聖書イザヤ書の49章6節からの引用である。<sup>12)</sup>そこには、来たるべきメシアにつき、「あなたを異邦人の光とする」と記されているが、この聖句はまた新約のルカによる福音書2章32節に再度取り上げられ、メシア来臨を告げるイザヤ預言の成就と解されている。つまりゲーテの上記引用句は、敬虔なユダヤ教徒シメオンが、両親に連れられ宮詣でに来た幼な子イエスを見て、メシアの到来を確信し、「この救いはあなたが諸国の民のまえにお備えになったもの、異邦人を照らす光である」<sup>13)</sup>と語ったとされる台詞と同一表現をとっているのである。だとすると、この聖霊降臨論の結びにおいても、「異邦人を照らす君、諸国の民を温める君よ！」と告げるゲーテは、「新しい一つのことば、霊のことば」により神と人とをとりもつことのできる新たな救世主とも言うべき、ういういしい創造精神の充溢した預言者の出現を予告していたのだということになる。

もう一つ、「異邦人を照らす君」に係わる発言のなかで注目すべき語は、「その心情をまわらぬ舌で歌うがよい(lalle)」という一文中にみられる *lallen* という動詞である。ゲーテは1772年11月、スイスの神学者兼文人ラーヴァーターの著書『永遠への展望』を評した一文を『フランクフルト学芸新報』に寄せているが、その結びにもまた、興味深いことに「まわらぬ舌で歌う」(*lallen*)という語が見られる。

「われわれは彼の（『永遠への展望』の）企てが成功することを願っている。そして、もし彼が何らかの助言をわれわれから聞きたいというのであれば、こう申し上げよう。彼はこの種の題材については十分に、いや、もう多すぎると言っていいくらい思索を

重ねてきたのだ。今はもう彼の魂が昂揚し、こうした思想の貯えを、さながら地上の宝のように仰いで、霊たちの世界をより深く感じとれるようになって欲しい。他者のなかにのみ自己自身を感じとることなのだ。そのためにも、われわれは彼が、われわれの時代の天下公認の見霊者と親密な交わりを持てるようにと願っている。この予見者のまわりには、天上の歓びが取り囲み、この人に向かっては霊たちも全身全霊を傾けて語たり、また、その懐には御使いたちが住わっていたのだ。この見霊者の栄光が彼（ラーヴァーター）のまわりを明るく照らし、できることなら、この人を燃え立たせてくれればよいのだが。こうして彼にも一度は救いの歓びを感じとってもらいたいのだ。また、預言者らがその霊を、口に言い表せぬ言葉で満たされると、そのまわらぬ舌で歌うとは、どのようなことなのか、おぼろげにでも判るようになって欲しいものだ。」<sup>14)</sup>

ここで話題になっている「天下公認の見霊者」が他でもないスウェーデンボリであることは、「天上の歓びに囲まれて」、「霊たちに語りかけられ」、「そのふところには御使いたちが住んでいた」などと、いかにも霊界交流を思わせる表現が連ねられているところからしても明らかであろう。ゲーテがフランクフルトでの病気療養期に、医者メッツの紹介によってシュヴァーベンの神智論者エーティンガーとの知遇を得、その編著書『スウェーデンボリと他の神秘家の地上並びに天上の哲学』を読むようになったいきさつや、またゲーテがその1章、「天上の霊の知覚とことばについて」に恐らく目を通していただであろうことに関しては、前稿においてすでに詳しく述べたところである。<sup>15)</sup> そこでは、聖書の第2コリント書12章4節中の「口に言い表せない言葉」が主題に掲げられ、「霊のことば」の由来と特性が長々と解き明かされていたのであった。わけても、パウロが第三の天において聞いたとされる「口に言い表せない言葉」という表現は、ゲーテの脳裏に妙にこびりついて離れなかったのであろう。それは『牧師の手紙』の狂信者擁護論においても、「あの使徒は第三の天で何を見たのであったか。口に言い表せない事柄ではなかったのか」と聖職者たちに激しく迫る反問の形で、そのまま取り上げられることになるのである。さらに、『天上の哲学』全篇を繙くゲーテの眼には、*αρρητα ρηματα* のギリシャ文字が飛び込んできたに違いない。これは「口に言い表せない言葉」とほぼ同義のギリシャ語で、序言及び第2部冒頭のスウェーデンボリ論のなかで使われている。それだけによほど強烈な印象を残したのであろう。ゲーテは上に引用したラーヴァーター評の結びに、エーティンガーのこのギリシャ語の二文字を強く意識して、「預言者たちが、ことばに尽くせない言葉 (*αρρητα ρηματα*) でその霊を満たされると、まわらぬ舌で歌うとは、どのようなことなのだろう……」と書き記しているのだ。ラーヴァーターの『永遠への展望』を評するゲーテの眼前には、『天上の哲学』に描かれている聖霊の形姿が鮮やかに甦っていたのである。以上見てきたように、この時期のゲーテの一連の文芸論からは、御霊によって選ばれ、「ことばに尽くせない言葉」を授けられて、その霊に酔いしれ、覚束なくも「まわらぬ舌でうた歌う預言者」こそ、やがて来たらんとする作品の主人公たりうべきことを繰り返して予見していたことが窺えるのである。

ゲーテのこうした一連の神智論的聖霊観が、やがて、ヴェルテルのような新種の霊にとり憑かれた人物を主人公とする独自の作品にまで昇華するには、ゲーテと等しく霊への渴

望、霊界への限りなき憧憬を抱き続けていた神学上の好敵手ラーヴァーターの存在を抜きにしては考えられない。ゲーテがその聖霊降臨論を綴った『聖書の二つの問題』を発表するや、1773年の9月初旬、ラーヴァーターはゲーテ宛てにその読後感を書き送っている。そこから受けた強烈な印象とその感激のほどが手にとるように伝わってくる手紙である。

「私が推測したように、『二つの問題』はあなたの作だったのだ……私は自分の魂の渴きがどれほどか、口にして言い表すことはできません。あれが、ある法学博士の手になるものだったとは——神学を修めたなどと言うけれど——われわれ神学者は、なぜ、こうも感性がないのだろうか？——私はただもう——がたがた震え、かっとながのぼって、口を閉ざすしかないのです——そして、口では表現できないのですが——どれほど私は、自分の魂の思い描く予感や、もっと大きな様々の暗示を、あなたから受け取って——見てみたいものと切望していることでしょう——そしてまた、とりわけ、私はあなたの考え出した、あなたの手になるキリストの理想像にどれほど——恋い焦がれていることでしょう。」<sup>16)</sup>

ゲーテの聖霊降臨の日に寄せた、あの詩の発散する怪しくも激しい聖霊の息吹は、紛れもなく同じ霊性を持ったラーヴァーターのうちに、激しく共鳴、共感する相手を見いだしたのである。ここでラーヴァーターは、神学者でありながら感性の乏しい己をなじりながらも、まさにそれとは正反対の極端な感性を示している。全身の「震え」、「激昂」、「沈黙」、さらには、その最果てに言語喪失感に喘いでいるのだ。極度の感動に言葉を失ってしまった自己を表現する術は、念頭に思い浮かんだ言葉が消えないうちに、直ちに紙に投げつけるしかない。一語、一句を書きつけては、ダッシュを打つ。だが、どれほどあがいてみても、いま魂に迫っていて、感じていることを言葉にすることは、所詮できない相談なのだ。この心境を伝えるには、「口では言い表わせないので」と書くしかなかった。無論、この手紙が全体として見たとき、自らの企図する『骨相学断章』にゲーテの協力を要請したものであることは疑いをいれない。だが、それにしても、『永遠への展望』を評したゲーテが、「霊のうちに *αρρητα ρηματα* の満ちる」とき、「まわらぬ舌でうた歌う」よう奨めた、あの提言に見事に応えた手紙だとは言えまいか。

ラーヴァーターはゲーテの『二つの問題』にとどまらず、『牧師の手紙』にも目を通していたようである。この虚構上の書簡についてもラーヴァーターは、恐らく1774年の春であろう、およそ次のような内容を持つ私信を送っている。

「もしもイエス・キリストが私の神でなければ、——私はもはや神を持たないことになります——そうすれば、ゲーテもプフェニンガーもラーヴァーターも夢想家であって、兄弟、すなわち、ひとりの父の子らではなく——死なない存在でもなくなります——すると、友情も何もかもなくなって——すべてが魔術の戯れのようなもの、存在しなかったことになるのです。……ああ、『牧師の手紙』と——『序曲』の——作者である君が——聖書の霊の唯一の享受者であり、見霊者でもある君が——どうしてその君が、イエスの血潮がこの世のいのちであることを疑うようなことができるのでしょうか。」<sup>17)</sup>

イエスの神性を認めない信仰姿勢を諫めようとする彼一流の論法はともかくとして、ラーヴァーターがここでゲーテのことを指し、「聖書の霊の唯一の予見者である君」と語り、文通の相手のこの詩人こそ、聖霊降臨の霊の賜物を授かった預言者であり、新たな見霊者であることを早くも見て取っているところに、いかにもラーヴァーターらしいひらめきと鋭い洞察力が感じられないであろうか。

ゲーテの方でも、その諫言に答えることを怠らなかった。1774年4月26日ラーヴァーターとプフェニンガー宛てに、ゲーテはあの有名な長文の返事を書くのである。

「親愛なる兄弟、君の兄弟である僕の至福を願ってしてくれる君の温情には感謝します。僕たちがお互いに理解し合える時が来ることを信じてください。愛する兄弟、君は僕と話をするとき、頭で理解しようとしたり、それはもう証明済みだと言い張ったりして、およそ経験というものをしたことの無い未信者とも話すような扱いをしています。しかし、僕の心情は、こういったこととは正反対なのです。間もなく君たちにお送りする原稿のなかに、これらのことに関する多くの説明を見つけることになるでしょう。……それに、君はいつだって証だ証だと言って、僕を責め立てるつもりなのでしょう！それは何のためなのですか。僕が存在しているということに証が必要とでもいうのですか。僕が感じているということに証が必要でしょうか。僕より以前にいた幾千もの人びとが、あるいは、ひとりであっても構いません、僕をいま力づけ、強めていてくれるもの、まさにこれと同じものを、彼らがどのように感じ取っていたのか、僕に示してくれる証があるのなら、そんな証を僕は尊び、愛し、崇めるのです。そういう訳で、人間のことばは、かりに坊主や淫婦がそれを集め一巻の經典にまとめたものであったにしろ、あるいは、あちこちに断章として書き残したものであったとしても、それは僕にとって、神のことばなのです。僕は心から親愛の情をこめ、そのような兄弟の首っ玉に抱きつきます。モーセよ！預言者よ！福音書の著者よ！使徒、スピノザ、マキアヴェリよ！と。」<sup>18)</sup>

ゲーテはどうやら、ラーヴァーターやプフェニンガーから厳正な意味でのキリスト教徒として、その証がないことを難詰され、それに真っ向から反論しているように見える。当時は啓蒙主義の全盛期で、何事につけ理性偏重の傾向が目立っていた。キリスト教の信仰もその例外ではなかったのだろう。信仰を「頭で理解しよう」としたり、論理的に「証明されたものでなければ承服しない」求道者が大勢いたのだった。また、その反面、信の世界が「経験を重んじた」のに対し、理性万能を標榜する人びとはそれを軽んじる風潮がみられた。ゲーテはラーヴァーターらによって、自分がそのような類いの人間と同じく、「未信者」として不当に扱われることに言いようのない憤りを覚えているのだ。彼らは二言目には、「証だ」、キリスト教徒としての「あかし」が必要だと迫る。だが、その証なら、自分にもあるのだ。「自分がある」ということ、そしてまた、いま「感じている」という事実こそ、何よりも雄弁に「自分の証」を物語っているではないか。ここまで書き及んで、ゲーテは突如「幾千もの人びと」の証に思いを馳せる。「自分をいま力づけ、強めていてくれるもの」、まさしくそれを、彼ら、いにしえの人びとは「どのように感じていたのか」、そのことを伝えてくれる証があれば良いものを。そんな「あかし」があるとなれば、敬虔

な信者のように、「崇める」心さえ惜しみはしないというのである。

ここからゲーテの「あかし」に関する言辭は、「ことば」をめぐる論題へとさらに高まっていく。一般にルター正統派や敬虔主義者たちによれば、聖書のことばは、モーセの律法を始めとして、イザヤやダニエルらの預言者、マタイやヨハネに代表される福音書著者、それに使徒パウロたちが神から直接靈感を受けて書き記し、「神のことば」として集成されたものと考えられていた。この教理はまた逐語靈感説の名で知られ、正統な聖書解釈上の基本的信条（Credo）と看做されていたのである。ところがである。ゲーテはこの信条を盾に取り、新たな自己流の解釈を加えて、あろうことか、二人の敬虔な神学徒に向かって言い放つのである。旧約聖書の著者であるモーセや預言者、それに新約の福音書記者や使徒たちはいざ知らず、こともあろうに「坊主や淫婦」たちの、人間的なあまりに人間的な「ことば」すら、自分にとっては「神のことば」だというのだ。であるからこそまた、異端の徒スピノザや宗教の排撃者マキャヴェリすらも同信の友、「兄弟」と呼んではばからないのであろう。つまり、ゲーテはここで聖書の、「神のことば」の成り立ちを説く逐語靈感説にあやかりながら、その実、今や「人間のことば」が、それに優るとも劣らぬ価値を持つものとなったことを、換言すれば、「聖書のことば」に代わって、「人間のことば」への帰依を表明しているのだと言えよう。そして、このことは、ほどなく兩名のもとに届けられる作品『若きヴェルテルの悩み』の、その主人公の発する「あかし」の「ことば」を見てもらえれば判る、とゲーテは上記引用の手紙のなかで作品名は伏せながらも、敢て断言しているのである。「間もなくあなたがたにお送りする原稿のなかに、その一連の説明が見いだされるでしょう」とは、その時、公刊間近に迫っていた『ヴェルテル』のことを指していたものと思われる。この手紙はその意味で、新しい預言の「ことば」を授けられ、「選ばれし人」ヴェルテルの到来を力強く証するゲーテの革新的な所信表明の書であったのである。

このゲーテの、「人間のことば」に寄せる信仰告白に対し、1774年5月1日、神学者ラーヴァーターは、驚くべきことに、それに同調するかのような内容を持った私信をゲーテに送っている。

「僕のうちに真理を生み出してくれるあらゆる真理は、僕にとって一神のことばなのだ。聖書外典のことばなのか？ 正典からのものなのか？ その連中は気がふれているのか？ 純粋な神の御ことばをこれまでに語らなかつた人、神のわざを行わなかつた人など、一人もいないのだ！ もし神のことばが聖書のなかに閉じ込められているとすれば一おお、何と禍であろう。聖書にはいやらしい面が多く含まれている一自然のなかにだってそうではないだろうか？一しかし、僕はいったい誰に向かって、こんな話をしているのだろうか？一天地神明に誓って言うが、一人の兄弟に向かってなのだ。一だが、それにしても、僕ら二人はどんなに変人と見られることだろう。僕ら互いの書きっぷりを、世間の皆が知ったなら、さぞかし、ならず者に偽善者だと思うことだろう。」<sup>19)</sup>

ラーヴァーターは上記引用文の冒頭で、三つの問いを畳みかけるように発しているが、その意味するところは正確には読み取り難い。しかしながら、恐らくこれは、逐語靈感説に

立つ人びとの間で神のことばの帰属性をめぐり、それが聖書外典からの偽ものか、それとも、正典からの本物なのか、あるいはまた、それが狂信者の発言なのか、激しい論争が当時繰り広げられていたことを物語っているのであろう。しかし、ラーヴァーターにとって、そんなことはどうでもよかった。なぜなら、どんな狂信者のなかにも、「純粋な神のことばを語った」人がいるはずだからである。そもそも、神のことばとは、いったい何なのであろうか。「聖書のなかに閉じ込められている」ような代物なのだろうか。いや、そうではあるまい。しかも、聖書そのものの中にすら、自然に似て、「いやらしい側面が多く含まれている」ではないか。だとすると、ゲーテがあの手紙で語ったように、聖書のことばも、「幾千の人びと」の、つまりは人類の、数ある「証のことば」の一つに過ぎないのではあるまいか。こうしたラーヴァーターの聖書観には、当時の歴史的関心に端を発する多少とも実証主義的な姿勢が現れているのであるが、それがゲーテの場合同様、原理主義的な聖書神学とは真っ向から対立するものであることを、彼自身百も承知していた。であるからこそ、このような思想を世間に向かって公言してはならない、と友人ゲーテに語りかけ、同時にまた、おのれへの自戒の言葉ともしているのであろう。

では、聖書が「神のことば」としての、その絶対的権威を失墜してしまったとすれば、その信仰の基盤を何に求めるべきと言うのであろうか。ラーヴァーターは同じくこのゲーテへの手紙のなかで、それへの解答を模索している。

「君が僕のことを兄弟のように思って、その意中を伝えてくれたのだと考えただけで、渴ききっている僕の心を、言いようもなく元気づけてくれます。すべての神学も、キリスト教も、永遠のいのちの希望も神への信仰も、キリストに寄せる直接的な感情を持たなければ、—それらはまた同時に、妄想、夢、たわごと、妄信、無神論、狂信ともなるものであることを、僕は毎日重く感じ取り、それは、理性による幾千の証明にもまさって力づくよく迫ってきます。僕が君をいま目の前にしていなくとも、君の生を信じているように、それと同じく僕が、キリストのいのちを確信していないということになれば—僕はそんな自分のことを偽善者、べてん師、お喋り、間違い、贖神者として蔑みます。無神論者かキリスト者かの、どちらかしかないのだ！僕は理信論者なんて軽蔑する。……僕にはイエス・キリスト以外の神はないのだ……」<sup>20)</sup>

どうやら、この手紙を書いているラーヴァーターにとって最大の関心事は、信仰者としてキリストを「信じている」ことではないらしい。「キリストとそのいのち」を如何に「いま感じている」という、その感情そのものが一大事なのである。このことは、上記文面中、「キリストに寄せる直接的な感情を持たなければ」と訳出した箇所に見られる *Christusgefühl* という奇抜な造語によく言い表されていると言えよう。ラーヴァーターにとっての転回点は、まさにこの一語に尽きるのである。「キリスト感」の有無こそが、真の神学か妄想か、永遠のいのちか妄信か、はたまた、キリスト者か無神論者かの、天下の分かれ目、その分水嶺になるというのだ。したがってまた、このような異常に昂揚した宗教感情は、それとはおよそほど遠い倒錯した種々の感情に容易に反転し得る契機をも孕んでいるのである。その高揚感が失せれば、「あらゆる神学、キリスト教、永遠のいのちの希望と神への信仰」も、たちどころに「妄想、夢、たわごと、妄信、無神論、狂信」にす

ら急変するのだという。そうなると、また真の宗教の礼拝者であったはずの者が、にわかには「気違いや贖神者」に変身することにもなるのだ。つまり、ラーヴァーターはあくまでも神学という視座からではあるが、およそ宗教感情と言われるもののうちにアンピバレントな側面が兼ね備わっていることを鋭く見抜き、脱稿間近に迫る小説の主人公、ヴェルテルの狂気と狂信の由来を早くも嗅ぎ取っていたのであろう。

1774年秋『若きヴェルテルの悩み』の公刊とともに、このラーヴァーターの予感物は物的見事に的中したのである。若きヴェルテルの眼には、キリスト教正統派の持つあらゆる価値観は逆転し、その意義は完全に失われて映っていた。であるからこそ、ヴェルテルは、あの牧師館のくるみの木を伐採させた牧師夫人のことに憤慨し、「馬鹿女」呼ばわりさえするのである。なぜなら、この女は、「聖書正典の研究とやりに鼻を突っこみ、キリスト教の、今はやりの道徳的批判的改革に大いに力をいれ、ラーヴァーターの狂信には肩をすくめて見せる」ような人間だったからである。<sup>21)</sup> ゲーテがここで、腐敗しきった正統派批判の急先鋒にラーヴァーターの名を挙げ、しかも、その彼の「狂信」にすら言及しているのを見ても、この小説の主題の一つが宗教的狂信者であることは疑いえない。そしてまた、このことは、アルベルトとの自殺をめぐる会話において、ヴェルテルが発する、「狂気と狂信」に関する弁護の言葉によっても完全に裏付けられるのである。

「ああ、君ら理性派の人たちは、と僕は微笑みながら叫んだ。激情だ、酔いだ、気違いだ、などと落ち着き払って、こともなげに言うが、君ら道徳家は酔っ払いを罵り、気違いを追っ払っているのだ……僕は一度ならず酔ったことがあるし、狂気とさほど違いのない激情にとらわれたこともある。そして僕は、そのどちらをも後悔してはいないのだ。なぜなら、何か偉大なことや、不可能に思えるようなことをやってのける非凡な人はみな、昔から酔っ払いだ、気違いだと言って、罵られなければならない運命にあったことを、僕は僕なりに判るようになったのだから。」<sup>22)</sup>

しかも、この「酔いや狂気」は、聖霊の降臨を受けて、憑かれたように「霊のことば」を語った初代の弟子たちや預言者たちの恍惚境にも比せられるものだと、作中の主人公ヴェルテルは解している。第1部の終りも近い、11月3日付の手紙のなかでヴェルテルは、そのあまりにも激しく変わる自己の胸中を、その最大の不幸の根源を自らの手で、次のように分析している。

「僕は、大いに悩んでいる。なぜなら、僕の命の唯一の歓びであったもの、あの神聖な、万物に命を与える力、それによって僕が自分のまわりに諸々の世界を造り出してきたあの力を、僕は失ってしまったからだ。あの力はうせてしまった！……そして、僕は全身を曝け出して、神のみ顔の前に立っている。まるで乾ききった泉のように、壊れた水がめのように！……僕はしばしば大地に身を投げ出して、神に涙を乞うた。まるで、空がかたくなに照りつけ、周りの大地が渴ききったとき、農夫が雨乞いをするときのように。しかし、ああ、僕はいま感じている！神は僕らの熱烈な願いに対し、雨と日照りを与えてくださるのではないことを。思い出すと今でも胸の痛みを感じるが、あの頃、僕はなぜ、あんなにも幸せだったのだろうか。忍耐づよく神の御霊を待

ち望み、それが僕の上に注いでくれた歓喜を、感謝の真心をこめ受け取っていたからなのだ。」<sup>23)</sup>

ここには、見霊者に特有の、霊の満干から来る歓喜と絶望の交錯、その変転極まりない心性が見事に描き出されている。この視点に立ってみれば、ヴェルテルの悩みは結局のところ、聖霊の持つ世界創造力を失ったことにあるのだ。あのころ自分が至福の絶頂にあったのは、「神の御霊」の「注ぎ」を「忍耐づよく待ち望み」、それがもたらす「歓喜」の情を味わい知っていたからであった。だが、今ではその聖霊にも見放され、魂の渇きに喘いでいる。しかも、ヴェルテル最大の悲劇は、「ああ、神は僕らの熱烈な願いがあるからといって、雨や日照りを与えてくださるのではない」という台詞に端的に言い表されているように、自ら切望して止まない霊の満たしが、二度と再び果たされることはあるまいとする予感、その悲壯感から来ているのである。ゲーテがアルノルトの「ベームの章」で繰り返した、「神は切望する者たちに、必ずや聖霊を与え給う」という祈りにも似たあのリフレインは、ヴェルテルの絶望感を綴るゲーテの耳ももには皮肉にも、まさしくその反証として響いていたに違いない。

#### 注

- 1) 新保弼彬：「見霊者ゲーテとその文学(2)」、『言語文化論究』(No. 14) 2001年、九州大学大学院言語文化研究院発行、46頁以下参照。
- 2) *Goethes Werke*, Hamburger Ausgabe, Bd. 12, 5. Aufl., S. 235 f.
- 3) *Ibid.*, S. 11.
- 4) *Ibid.*, S. 12.
- 5) 『旧約聖書』日本聖書協会、1955年改訂版、『創世記』1章1節、1頁。
- 6) *Ibid.*, S. 13.
- 7) 『新約聖書』日本聖書協会、『ヨハネの第1の手紙』3章26節以下には、聖霊のことが油として表現されている。
- 8) Langen, August: *Der Wortschatz des deutschen Pietismus*. 2. Aufl. Tübingen 1968, S. 345.
- 9) *Ibid.*, S. 90.
- 10) *Ibid.*, S. 25.
- 11) *Der junge Goethe*. Neu bearbeitete Ausgabe in 5 Bänden. Hg. v. Hanna Fischer-Lamberg, Bd. III, Berlin 1966, S. 124.
- 12) 『イザヤ書』, 前掲書1015頁。
- 13) 『ルカによる福音書』, 前掲書86頁。
- 14) *Der junge Goethe*. Bd. III, S. 91.
- 15) 前掲論文『見霊者ゲーテとその文学(2)』, 44頁以下参照。
- 16) Möbus, Gerhard: *Die Christus-Frage in Goethes Leben und Werk*. Osnabrück 1964, S. 115.
- 17) *Ibid.*, S. 118 f.
- 18) *Goethes Briefe*. Hamburger Ausgabe, hg. v. K.R. Mandelkow u. B. Morawe, Bd. 1. 1962,

S. 158 f.

- 19) Möbus: *Christus-Frage*, S. 121.
- 20) Ibid., S. 121.
- 21) *Der junge Goethe*, Bd. III, S. 158.
- 22) Ibid., S. 134 f.
- 23) Ibid., S. 161 f.